

若いお母さんたちへ

娘と共に暮らす中で

はるにれの会

向山陽子



娘みづきは五歳になりました。ついこのあいだ入園式だと思ったのに、もうすぐ年長組です。娘と共に過ごす時間の中で、考えさせられたことを書いてみます。

○みんな一緒のお正月

昨年の暮、主人が休みになるとすぐ、家族三人で東海道を車でつつ走り、明石の私の両親のもとにいきました。毎年、暮かお正月には、弟の家族も含めて、全員集合して写真撮影とあいなるのですが、今年は、弟家族はアメリカ滞在となり、寂しいだろうからと、夫の思いやりを感じながら、大掃除もそこそこにでかけました。

暮の三十日には向山の両親宅へ帰り、三十一日からは向山家全員七人で、群馬県四万温泉へ。向山家としても、家以外の場所での初めての年越となりました。

若輩の我家としても、又、まだ年少の娘にしましても贅沢すぎるのは百も承知の温泉での年越でした。

向山の男性達は、皆、酒をよく呑みます。お正月は、朝から晩まで、呑んで、遊んですごします。結局、女達は、立ち働きます。もちろん、おせち料理も、全て手づくり。親戚の、親を亡くした私達の世代の者が、お正月の寂しいのが辛いと、子どもを連れてやってくると、おじいちゃん、おばあちゃんの味を知らないからと、本当によくしてあげる両親と祖母です。

三が日がすぎ、私達も自分の家にひきあげ、会社や学校が始まり、女正月といわれる小正月の頃には、母も祖母も、風邪をひいて寝こむのがここ数年の常でした。腰を痛めている祖母は、休んでいてと言っても、立ち働きます。

その祖母のことを思って、母が温泉での年越を言い出

し、その母のことを思って父が乗り気になり、暮の大掃除には、この計画が実行できるようにと一番よく働いたといえます。祖母こと「ひいばあ」は、秋口から健康にことのほか注意していました。

私達がこの計画に参加するかどうかは、なかなか決心がつきませんでした。

結婚してから十二年、娘のみづきの出産直後を除いて毎年、年越は、向山の両親の家でした。この機会に、我家三人だけの年越を、我家で経験するのもいいとも考えました。お正月の温泉行は出費も大変です。

しかし、ある時、ひいばあが言いました。「おばあちゃんとおじいちゃんと三人で温泉に入ってきたけど、三人とも口を開くと、みづきも連れてきたいね。みづき、みづきなんだよ。」と。

そう、向山全員が揃ってこそお正月なのです。

全員揃って、今年もよろしくと、新年の挨拶をしなくては一年がはじまりません。

そして、一人きりの孫、みづきの存在は向山家にとっ

てなくてはならないものになっています。

平素は別に暮らしていて、月に二三日しか行かないけれど、みづきが存在しているというだけで、生命とか未来に勇気づけられ、明日を生きる希望になっているようです。

私達夫婦にして然り。父母、祖母にはななおさらでしょう。

こうして、皆で温泉に入り、花札、百人一首、ゲームに明け暮れ、着物を着て皆で山の向こうまで歩いて初詣で行き、ごちそうを鱈腹食べて、贅沢な年越をするのととあいまりました。

あちこちで「仲がいいねエ」と声をかけられ、ひいばあから孫まで七人は、増々気をよくして、ニコニコと微笑んでおりました。

私にしてみると、やっと「家族」というものがわかりかけ、皆がニコニコしていることが、私にとっても幸せなのだ、思えるようになった、少し成長できたお正月でした。

○「キモチガワルイ」

暮の明石でこんなことがありました。私の両親も、みづきが行くと大騒ぎです。みづき用のプレゼントを入れる箱が用意されており、日頃から、みづきが来たら子どもが喜びそうな物を貯めておくようです。みづきも、明石ばあばに、お手玉や、あやとりを教えてもらおう、明石じいじには戦争のおはなしをしてもらおう（夏休み「じいじ、戦争に行ったの？ おはなしして？」と、突然尋ね、父は何と話せばよいのかとまどい、「今度来るまでに、みづきに話せるように考えておくれ。」と約束しました。）と、何日も前から楽しみにしていました。

みづきはプレゼントをもらい、大喜びし、おじいちゃんも、おばあちゃんも嬉しくて、みづきを抱っこしようとする、スルッとぬけて私の所へきます。頬がふれるほど近づくと、サッと私の所へきます。「どうしたの？」ときくと、小さな声で「キモチガワルイ」と言う

のです。

確かに、四ヶ月ぶりに会う父と母は、会うたびに、老いが目につくようになってきました。しかし、月に一、二度 会っている向山の父、母、祖母には、決して出てこない言葉です。

「一緒に暮らす」とは、こういう事か、と深く考えさせられた出来事でした。

もちろん、帰る頃には、抱っこもさせるようになりましたが、見送る寂しそうな父母を見ながら、又、みづきを連れてきてやらなくては、と思うのでした。そして、みづきに、私の育った、海や、山に、触れさせたい。みづきのおかあさんの小さかった頃の思い出話したい。その中に出てくる、おかあさんのおかあさん〓明石ばあばのはなしもしたいと思うのでした。

○「明石ばあばのおかあさんはどうしたの」

その 1

ある日、台所で一緒にじゃがいもの皮をむいている

と、突然、みづきがきました。

「ねえ、みづきのおかあさんのおかあさんは、明石ばあばでしょう。明石ばあばのおかあさんは、どうしたの？」

オット……おちついて、おちついて……

「ウーントネ、明石ばあばのおかあさんはとてもよく生きて（ナント不自然ナ表現！）八十三歳でなくなつて、今は土にもどつて、お星さまになつて（土ニナッタノ？ 星ニナッタノ？ ドッチチナノ？）みづきや、おかあさんを見ててくれるよ。」

「フーン、明石ばあばも、八十三歳になつたら死ぬの？」

「ウーん、もっと生きるかもしれないね。明石ばあばが八十三歳だと、おかあさんは六十歳位かな？」

「エーッ、おかあさん、おばあちゃんになつたらイヤダーッ」と泣き出したのです。

その 2

その数日後、静かだなと、のぞいてみるとシクシク泣

いています。

「どうしたの？」

「おかあさんも、おばあちゃんになったら死んじやうの？ 死なないで！ みづき、一人ぼっちになっちゃう。」と言うと、ワッと泣き伏して、私の胸に顔を埋めました。

「そうね、おばあさんになったら、いつかは、お星さまになれるかな。みづきは、大きくなって、大好きな人と一緒に暮らしていいのよ。赤ちゃんが産まれれば、一人ぼっちじゃないよ。おかあさんも、明石ばあとは一緒に暮らしてはしないでしよう。大好きな、おとうさんとみづきと暮らしているでしょう。」

「いやだ、みづき、ずっとおかあさんと一緒にいい。」と泣き出しました。

その3

涙をためた目でじっと私を見つめて、

「みづきも、死ぬの？」

「そうね、ひいばあだって、たくさん生きてるけど、ま

だまだ生きるでしょう。伊那のおばあちゃんだって八八まで生きたでしょう。たくさんたくさん生きて、一生懸命生きて、それからいいんじゃない？」

「ウン、わかった。みづきね、百よりもっともっと一生懸命生きる。おかあさんも一緒にね。いい？ 一緒に、百も二百も無限大も生きるんだよ。ね。」と、明かるく、真剣に念をおされて、

「そうね……たくさんたくさん、一生懸命生きてれば、土に帰りたくなるかもしれないね。」

「お星さまになるの？」

「うん、一生懸命生きて、他人ひとに優しくできた人はね。」
と言ってから、

「順番があるのよ。みづきは、まだ五歳しか生きてないから、まだまだだよ。みづきが死んだら、おかあさんも、おとうさんも、じいじやばあばも悲しくて心がつぶれちゃうからね。」とつけ加えずにはいられませんでした。

2・3は、冬休みに入ってすぐ、伊那の遠縁の方のお葬式に参列した後の、みづきと私の会話です。昔ながら

のお葬式で、詳しくはここでは述べられませんが、他人に優しく、一生懸命働いて八十八まで生きた、伊那のおばあちゃんは、澄んだ空気に、山に囲まれて、「土に還った」と自然に思えました。帰路、「おばあちゃんの星、あれ？」と、星空を指さしたみづきでした。

今までも、飼っていた犬や、猫の死に会ったり、痛ましいニュースに、「この子、どうしたの？」と、聞きにくる娘でした。

昨年の夏も、原爆を扱った絵本「おこりじぞう」や、戦争を扱ったアニメ「チロンヌップのきつね」を観て、「戦争ってやだね。兵隊さんがこなかったらコロも死ななくてよかったのね。」「兵隊さんも、戦争がなかったら、やさしいおじさんなのね。」と、私がびっくりするような感想を言いました。日頃の一人遊びの時間も、「死」や「戦争」は、娘の口からよく出てきます。

クリスマスには、幼稚園での聖劇（ベージェント）で、天使になり、神さまを身近に思う時を持った娘です。

この冬、私は、娘の心が奥深くなくなっていく過程を、身近に感じる事ができました。

一人で、小さな心で、思いめぐらしている娘を知りました。

そんな娘が、いとおしくなります。と同時に、私自身が、私の人生を、真剣に生きて、娘にきかれた時、真剣に、娘に向きあえなくてはと思った冬でした。

親や、周りの大人が真剣に向きあって話してくれた話は、幼い時の事でも、しっかりと心に住みついて、困った時、苦しい時に、思い出し、勇気づけられた経験は、誰にもあるでしょう。話の中身は忘れても、真剣に向きあってくれた大人の姿は、目は、私の人生を勇気づけ、励ましてくれます。

「幼児期とは、この人生、生きるに値すると、思えるかどうかの、人生の根っこ」

この言葉を、かみしめています。

○ 歩くこと

我家は、西武池袋線、新宿線の三つの駅の中心点にあり、どの駅からも歩いて15〜20分かかります。そのかわり、静かで、鳥の声や風の音、木々のざわめきで、目が覚めます。(もともとこの十年で、緑は半減しましたが)

幸か不幸か、私が自転車に乗れるようになったのは、娘が二歳八ヶ月の時でしたので、「歩く」ことには、何の不便も感じず、道々遊びながら、三十分かかってすぐその公園へ行ったり、一時間かかって駅まで歩くことも、苦ではなく、むしろ楽しい時間でした。「歩く」ことの成果は、目に見えない所で、娘の心身に、積み重なってくれました。

体が丈夫。今、片道、二十分の通園も、登園は毎日歩いています。自転車の荷台で、モコモコに着ぶくれながら登園する子に比べると、娘の何と身軽なこと。家を出

る時着るベストも、五分と歩かないうちに脱いでしまいます。病気もせず、有難く思っています。

歩き方が上手で、速くなりました。足の出し方や、障害物、車に対しての身のこなし、判断力など、積み重ねてしか身につかないものです。

歩く楽しみを知っています。道端の草花や、石や、今なら霜柱に目を止め、立ち止り、拾い、幼稚園までとけないように持つていくにはと頭をひねり……自転車の荷台で荷物のように運ばれるのと比べ、何十倍も、人間らしい営みをしているようです。

そして、私との何にもわずらわされない、二人きりの時間が持てます。

先日「みづぎ、帰りも毎日歩こうかな。だって、楽しいんだもん。」と言いました。

幼い時からよく歩いていたとはいえ、二十分の徒歩通園を母子とも今のように楽しめるようになったのは、二期、運動会の頃からでした。

私には「信念」めいたものもあり、徒歩通園と決めていましたし、二十分の距離は、娘にとっては「遠い」ものではないと思っていました。その信念が邪魔をして、一学期の半ば頃、疲れがたまってきた娘の、心に寄りそうことを忘れて、歩かねばならないと思わせてしまったこともありました。

そんな時、後から追い越していく自転車に乗った友達を、娘はどんなに羨しく思ったことでしょう。

「○○ちゃんはすごい。自転車に乗ってすごい。」と怒りました。まだまだ、先に着くのが良いという価値感がまかり通っている子ども達でした。

「そうね。○○ちゃんは小さい時からあまり歩いてないからね。みづきは、よく歩けるしね。」と、答えるのが精一杯でした。

「今日は、みづきも疲れているようだから特別サービスで、お地藏様まで自転車で行こう。」といった朝の、娘の嬉しそうな顔を忘れることはできません。

二学期になると、走りたくなり、私が追いつけないで

いると、「おかあさん、自転車に乗っていいよ。みづき、走るから。」と言うようになりました。

私にとっては送った帰りも自転車で帰ってこられるし、願ってもないことです。

ところが……毎日、手をつないで登園していたので、手をつながないと、何とも寂しいのです。娘にとって、はじめての運動会が近づいてきて娘なりの緊張が高まってきた頃「走る」と言わなくなりました。久しぶりに二人で歩いた朝の気持ちがおちついたこと。やっぱり、私だけが自転車を転がすのも止めようと思いました。

私が片手で自転車を転がし、片手で娘と手をつないでも、それでは、自転車本位の速さになって、娘の心の速度、「あっ」と何かに気づき、立ち止まり、坐りこみ……には寄りそってやれないのです。

金木犀の花を拾いながら登園するようになった頃から、徒歩通園が、本当に楽しめるようになりました。毎朝、道には何かしら花がおちていて、先生へのおみやげがいっぱいになります。花が、風に舞う落葉になり、葉

っぱのお面になり、今では霜柱です。

サックサックと霜柱を踏む娘の姿が、私の幼い頃の思い出と重なります。

「おかあさん、白い影だよ。」

「えっ？」と娘の見やる方を見ると、本当です。陽の光に、霜がとけて、黒く広がっている畑に、家並の影の部分だけが、まだ霜がとけず、白いのです。電線の影は白い霜の線のままなのです。

「今日は、少ししか白い影がないね。」

私達母子だけがわかる「今朝は暖かいね。」という会話です。

歩くって本当にいいですね。

○お弁当と給食のこと

ある秋の日の午後、公園で、他の園や、保育園に行つた友達と久しぶりに遊びました。

母親達もベンチに坐つて、のんびりと井戸端会議がはじまりました。

「お弁当、大変ね。うちの園は、給食がはじまつたのよ。この前、うちの息子が休んだ時、届が遅かったのか、給食が息子の分も届いちゃって、わざわざ先生が持ってきて下さったのね。食べてみたら、おいしいのよ。」

母親達は興味津々。

「給食センターではなく、ちゃんとした仕出し屋さん頼んでるらしいの。毎日メニューは違うし、栄養も色とりも考えてあるし、お弁当じゃ、あそこまでできないわね。」

「給食費は？」

「安いよ、一食二百円しないわよ。」

「メニューは？」

「ごはんも毎日違うし、野菜も多いし、子どもが好きそうな動物や花の形にぬいてあったり、手がこんでるの。皆と同じものを食べるから、よく食べてくるわよ。」

毎日のお弁当づくりは正直いって楽ではありません。この話を聞きながら、毎日の娘のお弁当のみじめさに、

小さくなりたい気持ちでした。

そうか。給食にする園もよく考えているのだな。ただ母親の安易なニーズに流されているだけではないようだ。頭から給食のある園はダメと思いきんでいた私は、狭かったナとツッパリ頭を反省する気がおこりはじめた時、彼女は続けました。

「週二回、お弁当の日があるんだけど、息子ったら頭にきちゃう。『今日は給食？ お弁当？』って毎朝きくの。『お弁当よ』っていうと『エーッ』って露骨にいやな顔をするし『給食』っていうと『ワァー』って飛び上って喜ぶのよ。失礼しちゃうと思わない。」

そうだ。子ども達に、おかあさんの作ってくれたお弁当を『エーッ』といやな顔をさせる結果になっている給食は、やはり、本当の幼児教育者のすることではない。

毎日、子どもが喜ぶからといって、お子様ランチを食べさせにいく親がどこにいますか。

ひょっとしておかあさんの体調が悪くて、おにぎりだ

けのお弁当であったとしても、おかあさんが、私のためににぎってくれたおにぎりだからおいしいのであり、おかあさんを思いやることもできます。お友達のお弁当が羨ましくなる時もあるかもしれないけれど、それはそれでいい体験でもあるし、全部食べて帰った時の、おかあさんの喜ぶ顔もみたいし、「今度は〇〇入れて。」と言ってみようかなとも思うし……。

母親としては、楽をしたい気持ちもわからないではないけれど、おかあさんと慕ってくれる今の時期、お弁当づくりまで他人にまかせる程、疲れてもいないし、忙しくもない。

おかあさんと慕ってくれるこの幼児期を、できる限り、娘の心のそばにいて楽しく過ごしたいものです。